

図画工作の教科観に関する一考察 — 冊子「図画工作とは—教科を考える—」を通して —

A Study on the Curricular Perspective of Arts and Handicraft Crafts:

Through the Booklet for Arts and Handicraft

鳥原正敏

TORIHARA Masatoshi

要旨

図画工作は教科観をつかみにくい教科である。都留文科大学文学部初等教育学科図工・美術教室では、教科観を探る研究活動として、冊子「図画工作とは—教科を考える—」を編纂し、大学の教員から現役の小学校教師、また教職を目指す学生まで、幅広い関係者が、それぞれの視点で教科観や可能性について考えを述べ、これを共有している。本論では、冊子「図画工作とは—教科を考える—」を通して、ここに綴られた大学教員、教師、学生の話に基づき、図画工作の教科観について考察を試みた。その結果、つかみにくい図画工作の教科観が立体的かつ具体的に浮かび上がるとともに、指導要領の目標と合致した教科観を共有していること、また、子どもたちが活動主体である図画工作において、教師が子どもたちに能動的に働きかけるといった、教師の役割についても確認した。

目次

1. はじめに
2. 冊子「図画工作とは—教科を考える—」について
3. 図画工作の変遷と現状
 - 3-1. 戦後教育における図画工作の成立と現状
 - 3-2. 多くの内容を求められる図画工作
 - 3-3. 現場にみる教科観の混乱とズレについて
4. 教科の可能性を探るために
 - 4-1. 図画工作の目標について
 - 4-2. 冊子「図画工作とは—教科を考える—」にみる多様な教科観
 - 4-3. 図画工作の可能性を探る
5. 冊子「図画工作とは—教科を考える—」にみる教科観の可能性
6. おわりに
7. 註
8. 参考文献

1. はじめに

図画工作は教科観をつかみにくく、これまで、どのような力が育まれるのか端的に説明するのが難しい教科であると言われてきた。これは教科観が時代と共に変化し続けてきたこと、理科や算数といった教科と違って、子どもたち自身が「感性をはたらかせること」、「つくりだす喜びを味わうこと」、「情操を養うこと」といった、数値化したり形として見比べたりすることができない「心」の動きに関することが目標であることが大きな要因だと考えられる。また、図画工作には、体を使って製作するなど身体の発達に関する活動のほかにも、準備や掃除、協働による責任や協力、協調など道德に関することも期待されている。そのほかにも言語活動の充実や、生きる力を育むことなど、求められることは多い。こういったことも教科観を曖昧にしている要因であろう。

このように、つかみにくい教科観についてしっかり理解するためには図画工作の研究者のみならず、様々な立場の関係者で教科について考え、理解し、共有する必要がある。

都留文科大学文学部初等教育学科図工・美術教室では、こういった課題に対する研究活動として、冊子「図画工作とは一教科を考える―」の編纂を行いながら、教職に関わる大学教員のみならず、現役の小学校教師、また教職を目指す学生まで幅広い関係者が、それぞれの視点で教科観や可能性について考えを述べ、これを共有している。

本論では、冊子「図画工作とは一教科を考える―」と、この基となった冊子「図画工作実技演習の手引き」を通して、ここに綴られた大学教員、教師、学生の話を中心に、図画工作の教科観について考察を試みる。

本論、『2. 冊子「図画工作とは一教科を考える―」について』では、冊子「図画工作とは一教科を考える―」編纂の目的と趣旨、変遷について確認する。「3. 図画工作の変遷と現状」では、教科の成立とこれまでの変遷をたどり、複雑な教科観を持つに至った背景を確認するとともに、教科の目標と教育現場とのズレや混乱について指摘する。「4. 教科の可能性を探るために」では冊子「図画工作とは一教科を考える―」を通して図画工作の教科観について読み解く。『5. 冊子「図画工作とは一教科を考える―」にみる教科観と可能性』では、冊子「図画工作とは一教科を考える―」を通して共有されてきた教科観について考察を行う。

図画工作は、ただ単にもの作りをおこなう教科ではない。明治のはじめに設置された当初は職能に関わることが中心の教科であったが、時代の流れのなかで様々な変遷を繰り返し、今日の複雑な教科観が生まれた。本論ではこういった複雑で豊かな教科観を、冊子「図画工作とは一教科を考える―」を通して、矮小化することのないよう、具体的かつ、立体的に読み解いてみたい。

2. 冊子「図画工作とは一教科を考える―」について

図画工作は教科観をつかみにくい活動で、どのような力が育まれるのか、端的に説明するのは難しい教科である。都留文科大学文学部初等教育学科図工・美術教室では、こう

いったつかみにくい教科観を、これに関わる者の中で議論し、共有するために、冊子「図画工作とは一教科を考える」を編纂しながら、図画工作の教科観について探求してきた。

冊子「図画工作とは一教科を考える」とは、都留文科大学文学部初等教育学科の「教科に関する科目」であり必須科目である「図画工作実技演習（平面）」と「図画工作実技演習（立体）」の授業を担当するそれぞれの教員が、各授業の中で学生に説明してきた教科の目標や意義、さらには指導上理解しておくべき考えについて言語化し、整理、共有を目指した冊子である。

第1版（図1）は平成26年4月10日に発行された。表題は「図画工作実技演習の手引き」であった。これは「図画工作実技演習（平面）」「図画工作実技演習（立体）」共通のテキストとしての意味合いが強かったためである。授業「図画工作実技演習（平面）」と「図画工作実技演習（立体）」は一对の授業で、それぞれ半期ずつ行われる。主に学生は初等教育学科の1年生が対象で、履修者は200名前後である。およそ9クラスを開講、6名以上の教員が各クラスを分担し、開講している。そのため冊子「図画工作実技演習の手引き」は、授業を担当する教員同士が授業内容や、お互いの教科観を共有しあい、どのクラスであっても授業の内容やレベルが変わらないようにするための工夫であった。また、図画工作に関する意義や考えを、各教員が「コラム」として具体的な事例を挙げながら述べている。



【第1版】 「図画工作実技演習の手引き」 ○全26ページ
 ○製作・発行：都留文科大学初等教育学科図工・美術教室
 平成26年4月10日発行
 ○企画・構成：鳥原正敏 ○編集：鳥原正敏／館山拓人 ○
 執筆者：鳥原正敏（本学図工・美術教室教授）、竹下勝雄（本
 学図工・美術教室教授）、館山拓人（本学図工・美術教室特
 任准教授）、井坂健一郎（山梨大学大学院准教授／本学図
 工・美術教室非常勤講師）、竹内紋子（本学図工・美術教
 室非常勤講師）

図1 「図画工作の手引き」 第2版は、平成26年7月10日に発行された。これは教員免許更新講習のテキストを目指したものであった。また表題は「図画工作について」に変更された。この改訂では、内容としては「図画工作実技演習の手引き」を引き継ぐものであったが、より教科観を意識して編集が行われた。そのために新たに武田史子著「版に表すこと」と、小俣英彦著「コラム 工作における刃物について」、鳥原正敏著「コラム 図工・美術がキラいなHさん」が追加された。

【第2版】 「図画工作について」 ○全34ページ ○製作・発行：都留文科大学初等教育学科図工・美術教室 平成26年7月19日発行○企画・構成：鳥原正敏 ○編集：鳥原正敏／館山拓人 ○執筆者：鳥原正敏、竹下勝雄、館山拓人、井坂健一郎、武田史子（本学図工・美術教室非常勤講師）、竹内紋子（本学図工・美術教室非常勤講師）、小俣英彦（東京藝術大学彫刻科非常勤講師／本学図工・美術教室非常勤講師）、早坂俊吾（本学文学部

専攻科教育学専攻)

第3版は平成27年4月16日に発行された。表題は「図画工作について」のままであったが、コラムとして新たに長尾幸治著「技術って何だろう」、早坂俊吾著「感動って何だろう？」布山浩司著「これからの子どもたちが欲する図画工作とは？」が追加された。

【第3版】「図画工作について」 ○全36ページ○製作・発行：都留文科大学初等教育学科図工・美術教室 平成27年4月16日発行○企画・構成：鳥原正敏 ○編集：鳥原正敏

○執筆者：鳥原正敏、竹下勝雄、舘山拓人（元本学図工・美術教室特任准教授）、布山浩司（本学図工・美術教室特任准教授）、井坂健一郎（山梨大学大学院教授／本学図工・美術教室非常勤講師）、武田文子、竹内紋子（沖縄県立芸術大学助教）、小俣英彦、長尾幸治（本学図工・美術教室非常勤講師）、早坂俊吾（元本学文学部専攻科教育学専攻）

第4版は平成27年7月18日に発行された。表題は「図画工作について」のままであった。コラムとして原田裕太著「図画工作で学級づくりを」が追加された。原田裕太氏は現役の小学校教員である。このように執筆者が授業に直接関わる教員だけではなく、外部の執筆者が加わることで、教科観が大学から外へと広がり、共有されたことは特筆すべきであろう。

【第4版】「図画工作について」 ○全44ページ ○製作・発行：都留文科大学初等教育学科図工・美術教室 平成27年7月18日発行 ○企画・構成：鳥原正敏 ○編集：鳥原正敏 ○執筆者：鳥原正敏、竹下勝雄、舘山拓人、布山浩司、井坂健一郎、齋藤千明（本学図工・美術教室非常勤講師）、竹内紋子、小俣英彦、長尾幸治（元本学図工・美術教室非常勤講師）、早坂俊吾、原田裕太（谷村第一小学校教諭）



図2 「図画工作とは
一教科を考える一」

第5版(図2)は平成28年6月24日に発行、表題は「図画工作とは一教科を考える一」に改訂された。これは、これまで<コラム>としてきた各教員や関係者の意見を中心に、教科観を探究することが目標となった為である。また、第4版第「図画工作について」は全44ページと分量も多く、内容も指導要領の解説と教科観にかんする内容が併記されていたため、論旨を明確化したり内容をひとつかみに理解したりすることが難しくなった。これを改善すべく、指導要領の解説にあたる内容を冊子「図画工作について」(平成28年度10月現在制作中)に、また教科観にかんする内容を冊子「図画工作とは一教科を考える一」に整理、分冊化した。

【第5版】「図画工作とは一教科を考える一」 全33ページ ○製作・発行：都留文科大学初等教育学科図工・美術教室 平成28年6月24日発行（「はじめに」と「おわりに」の一部を改変し、平成28年7月9日に「平成28年度教員免許更新講習テキスト」として改変版を発行）○企画・構成：鳥原正敏 ○レイアウト：布山浩司 ○編集：鳥原正敏 ○執筆者：鳥原正敏、竹下勝雄、舘山拓人、井坂健一郎、武田文子、竹内紋子、小俣英彦、長尾幸治、早坂俊吾、原田裕太

冊子「図画工作実技演習の手引き」は授業のテキストとして発行された。その後「図画工作について」、「図画工作とは一教科を考える」と表題を改訂するとともに、コラムで各教員が述べていた、教科の可能性や広がりといった内容を柱に、教科観をより立体的かつ、具体的に理解し、共有しようとする試みへと変化していったのである。

また、執筆者は授業に直接関わる教員を中心に、学生や現職の教員まで広がっていった。授業に関わる教員の中には東京藝術大学で制作指導を担当する者や美術教育に関する博士課程在学中の学生、作家として活動するものが含まれており、幅広い層を形成している。

このように、冊子「図画工作とは一教科を考える」の編纂は、図画工作関係者のみならず美術の専門家の視点や学生といった様々な視点から、改めて図画工作を立体的に捉え直そうとする研究活動である。

3. 図画工作の変遷と現状

図画工作の活動は明治の学制発足当時から始まった。図画工作が教科として位置付けられたことにより、我々日本人が早い時期に西洋の新しい考え方であった「美術」を理解することにも大きな役割を果たしたと考えられる。当初は罫画や臨画といった技術、職能に関わる活動が中心であった。また、時代とともに国家主義や軍国主義による思想統制に利用されることもあった。その後、様々な変遷を経て太平洋戦争の後、今日のイメージに近い活動となった。現在の図画工作は子どもたちの発達を担保する活動である。また、幼稚園教育における「表現」や、中学校「美術」とつながる活動であるがゆえに、これらと混同され、教科観や目標の理解に混乱があるように思う。

本章では、戦後における図画工作の成立当初の様子と現行指導要領をもとに、冊子「図画工作とは」に掲載された「図工・美術がキラいなHさん」を通して、本来、図画工作に求められるイメージと現場のイメージのズレについて指摘したい。

3-1. 戦後教育における図画工作の成立と現状

宮坂元裕著『「図画工作」という考え方』^(註1)によると『1945年、連合国軍は日本を占領統治し、GHQ（総司令部）の中にあるCIE（民間情報局）が文科省の窓口だった。CIEは、新しい教育の中に「ART AND HANDICRAFT」（アート・アンド・ハンディクラフト）を入れるよう指示した。文部省側の担当者であった山形寛は、有識者の間を奔走した。英語名は決まっているのに日本語名が決まらなかったからである。』とある。こういった混乱の中、戦後の教育改革を経て、今日の図画工作が成立した。

日本社会が経済成長期に入ると、世の中は学力主義に陥り、いわゆる周辺教科である図画工作は教科観や活動概念が掴みにくく、目的や評価が曖昧な教科と言われるようになった。その後平成28年4月1日に「学校教育法等の一部を改正する法律（平成27年法律第46号）」が施行された。これにより小中一貫教育が始まり、初等教育の範疇である図画工作と中等教育の範疇である中学美術・高等学校芸術科目美術がつながった。学習指導要領高等学校芸術科美術Ⅰの目標には「美術の幅広い創造活動を通して、美的体験を豊かにし、

生涯にわたり美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばし、美術文化についての理解を深める。』^(註2)とある。これにより、発達を中心とする図画工作と、中学美術のつながりが明確になった。しかしながら、図画工作の活動内容は未だ混乱の中にあり、明確化されていない。その上で、上述の「生涯にわたり美術を愛好する」の通り、図画工作は初等教育の活動から、生涯にわたって美術に関わる基礎的な理解と素養を育む活動の入り口ともなったのである。このように更に広がりを見せる教科観の現状を踏まえ、いま改めて図画工作とは、いったいどのような活動か、考えるべきであろう。

3-2. 多くを求められる図画工作

宮坂元裕著『「図画工作」という考え方』にある通り、当時の関係者が混乱、苦勞しながら戦後の図画工作を作り上げた様子が見える。

日本では、近代にいたるまでいわゆる西洋的な概念である「美術」という発想はなく、日本古来の価値観を中心に、様々なものを作り上げてきた。また「ものづくり」は、労働作業と同時に教育活動でもあった。即ち、弟制度による「人づくり」(教育)の場でもあった^(註3)。こういった考え方を起源におく戦前の図画工作と、CIEの提案する「ART AND HANDICRAFT」は必ずしも一致しなかったであろう。

現在の図画工作は6年間のプログラムであるが、実際は1～4年生における「造形」と5・6年生における「表現」に分けて考えるべきであろう。はじめの4年間は、自己の感覚や体験から「よさ」を感じ取り、造形に関する基礎的な知識を獲得する。心も体も発達する5・6年生では、これを基に写実的な表現や、他者の表現により興味を持ち、中学美術につながる活動へと進み、「美しさ」について考え始める。

これと並行して、造形的な感覚を試す活動、「造形遊び」が全学年に設定されている。これは体を使って、偶発的な製作体験から、造形活動の基礎的な知識・理解と技能を学び取る活動である。また、現行指導要領では「表現」と「鑑賞」活動に共通する能力に関する内容として「共通事項」が設けられた。

このように図画工作は、複雑で立体的に練り上げられた活動をイメージしているものの、指導要領のみから、こういったイメージを読み解くことは難しい。また、授業で使われる材料は基本的には低学年から高学年まで大きな変化はなく、活動のイメージを表面的に読み解いた場合、本質的な流れやねらいを見失ってしまう。また高学年の活動を中心に読み解くと、図画工作を中学校「美術」の劣化版として誤認しかねない。

図画工作という教科は他国にはあまり見られないユニークな活動である。こうした独自性が、日本の文化に与えた影響は計り知れない。

上述の通り、図画工作は子どもの中にある「よさ」を育みながら、自己と他者との間に生じる「美しさ」を学ぶ活動である。またここでは、単なる学習にとどまることなく、製作や共同作業による教育「ひとづくり」を引き継ぐものでもある。しかし、「よさ」と「美しさ」が一般的には分離しにくい概念であること、戦後教育の中で徒弟制度が否定されたこと、図画工作に多くの内容が求められてきたことなどから、教科観について教育現場に混乱とズレが生じているのではないか。また、グローバル化などの社会構造の変化や教育制度改革によって、図画工作は改めてその意義を問われている。

3-3. 現場にみる教科観の混乱とズレについて

これまで本章で述べてきた通り、図画工作の目標と教育現場ではズレが生じていると考えられる。冊子「図画工作とは一教科を考える」P 16,17では、こういった課題について鳥原正敏著（本論筆者）「図工・美術がキライなHさん」で指摘している。

『図工・美術がキライなHさん』

Hさんは神戸に住んでいる高校生の女の子、1995年大阪で生まれ、幼稚園年中から小学校4年生の初めまで名古屋市郊外で過ごし、その後、神戸に住むようになりました。Hさんは「作りだすことは好きだけど、図工、美術には馴染めない」と言っていました。以下、Hさんの話です。

Hさんの話

私は、名古屋で生活していたころから「作りだすこと」が好きだったので造形教室に通っていました。両親は私の興味を理解して、積極的に応援してくれました。

一方、小学校の図画工作の授業には興味が持てませんでした。理由は、時間がコマ切れで製作や表現を突き詰められず、不自由を感じたり、評価の基準に疑問を持ったり、同級生が騒がしく集中できなくてイヤな思いをした、などです。

父は生き物が好きで、観察のための図や絵を描くのが上手です。私も幼いころから昆虫や爬虫類、植物に興味を持っていました。しかし同級生の女の子には理解されませんでした。図画工作の時間に「生き物」を作っても同級生には理解されず、自己否定を受けているようでイヤな気持ちになりました。中学校の美術の時間も同じような状態でした。

しかし、神戸で通い出した造形教室は自由な雰囲気あって楽しかった。制作期間や時間が決まっていないため、やりたいこと、作りたいことを追求できるし、参加している様々な年齢の子どもたちは「へー、そんなん好きなん、いいんちゃうそういうのも」と、今まで学校の中で理解されなかった私の価値観を理解しようとしてくれました。

だから造形教室には長く通っています。中学校受験のため4カ月間休みましたが、中学校に入学してから復帰、部活や塾で忙しかったけれどやめませんでした。高校に進学しても“美術の授業には自由な雰囲気がない”と感じたので、芸術科目では書写を選択しました。造形教室で制作活動を行うので敢えて他の分野に挑戦したかった、と言う気持ちもありました。

高校生活は忙しいけれど、造形教室に通うことはストレス発散になるので続けたいと思っています。いろいろな年齢の子どもたちと関わることは楽しいし、小さな子どもたちに励まされているように感じたりもします。制作中にたわいのない会話をしながら、お互いの価値観を認めあったり、共感しあったりしていると感じています。造形教室は、いろいろな価値観を共有しようという雰囲気があるのでとても良いと思います。

生き物が大好きなので将来、大学は農学部に進学したいと考えています。でも、今後も趣味として制作は続けたいと考えています。

また、科学部の活動では観察をしながら図や絵を描くことがありますが、特徴をとらえたり、形を理解しながら見たり描いたりすることに、造形教室での学びが役に立っていると思います。

幼いころ自分の価値観を受け入れられずイヤな思いをしたけれど、造形教室では価値観を受け止めてもらって嬉しかった。今は自分の興味のある生物のことや環境問題を作品で表現し、多くの人に私の考えや思いを発信したいと考えるようになってきました。これからも制作を続けていきたいと思っています。〈2013年8月25日 於：兵庫県西宮市 子どもアトリエ^(註4)〉

私はHさんの話を聞きながら、なぜHさんが図画工作や美術に興味を持てなかったのか不思議に思いました。「つくりだすことはとても楽しい」とHさんはいいます。そして「自分の好きなもの、興味のあることを、制作を通して発信したい」とも言っています。図画工作や中学美術の教科の目標には「つくりだす喜びを味わう(図画工作)」「創造活動の喜びを味わい(中学美術)」という一文があります。また、自分の考えや感じたことを制作や作品を通して発信しようとすることは美術のもつ本質的なイメージです。

しかし、なぜかHさんは図工・美術には馴染めなかったと言います。なぜこのようになってしまったのか。私は、様々な原因が複雑に絡み合っているように思います。そしてHさんの話を聞きながら、教科教育としての図工・美術はどうあるべきか、今一度考えてみる必要があると思いました。

著者の鳥原正敏は、図画工作の目標と、Hさんが受けてきた図画工作や美術の授業のイメージにズレがあることを指摘、問題を提議している。Hさんが受けてきた図画工作や美術の授業では「つくりだす喜びを味わうこと」や「表現を探究すること」、「多様な価値観をお互いに許容しあう」といった、学習環境が十分ではなかったことを確認しつつ、造形教室ではこういった環境が整い、Hさんが生涯にわたってつくりだすことに興味を持ち続けたいと考えていることを確認している。

これまで述べてきた通り、現在の図画工作は複雑で立体的な教科観を持つ一方、活動のイメージをつかみにくい教科である。また、図画工作の目標にみる曖昧さから、コラム『図工・美術がキラいなHさん』にみられるように、本来、目指すべきことと教育現場の活動状況に、ズレが生じている。これについて、前出の宮坂元裕氏は著書『「図画工作」という考え方』の中で以下のように述べている。

『ギリシア時代からアポリア^(註5)とされてきた美術教育の内容を、日本人は、独自の考えで曖昧さを残しながら折衷融合を繰り返し、改良し続けて今日の図画工作があるということである。折衷や融合は、いろいろな部分の長所だけを取り出してきたので、学習指導要領にある図画工作の目標などに曖昧さを残すという弊害をもたらした。しかし、子供たちにとっては、いろいろな考えの「いいとこどり」をしたおかげで活動の選択肢がたくさん増えたのだから幸せである。』^(註6)

ここからも読み解けるように、現在の図画工作には混乱があるものの、これを課題と捉えるだけでなく「いいとこどり」といった「可能性」として読み解くこともできる。ではこのような図画工作の持つ多彩で多様な可能性を、どのようにとらえていけばよいのだろうか。こういった可能性をより深く具体的に、これからの時代への対応も踏まえて理

解していくためには、図画工作の範疇を超えて、多様な関係者で検討していく必要があるだろう。

4. 教科の可能性を探るために

図画工作は、目標や活動イメージがつかみにくい教科である。これは、これまで「いいとこどり」をしながら、教科の可能性を最大限追求してきた結果である。こういった教科の可能性を追求するためには、指導要領の目標を狭義に矮小化して読み解くのではなく、その奥にある多様で深い可能性を読み解かねばならない。またこういった掴み難い教科観や目標を子どもたちと共有する必要がある。

本章では冊子「図画工作実技演習の手引き」と冊子「図画工作とは一教科を考える」につづられた言葉から、図画工作の教科観について読み解き、指導要領の解釈と現在の図画工作があるべき姿と図画工作の持つ可能性について考察を試みる。

4-1. 図画工作の目標について

現行小学校学習指導要領では、図画工作科の目標を「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」^(註6)としている。これは活動内容を「表現及び鑑賞の活動」とし、子どもたちが自ら「感性を働かせ」ながら、教師が子どもたちの「造形的な創造活動の基礎的な能力を培い」、さらに「豊かな情操を」養う活動である。つまり、図画工作とは、子どもたちの心を育む活動であり、また、子どもたちと教師が相互に関わり合いながら行う活動である。こういった意味においても、教科の目標を子どもと教師が共有することはとても重要である。しかし、この目標は大人に向けて書かれたものであるため、原文のままでは子どもと共有することは難しい。また、言葉が少ないため、経験や知識が不足していると大人であっても深く読み解くことは難しい。

こういった課題に対して、冊子「図画工作実技演習の手引き」では「4.図画工作の目標と活動 (1)教科の目標に鷹野晃著「図画工作の目標 (訳) P7」を掲載している。鷹野氏は現役の教師である。また、美術教育における主導的な立場でもある。尚、原文は縦書きであるが、本論では紙幅と構成の都合で、横書きで掲載する。これに伴い文章のイメージを損なわないよう努めながら改行を行った。

『図画工作の目標 (訳)』鷹野晃著

つくったり、描いたり、見たりする 面白〜い授業のなかで 今もっているわたしの心をめいっぱいつかって、「やった! こんなものができた!」「すごい、すごい!」って感じの うれしさをいっぱい、いっぱい味わいながら。

どんなときでも、だれとでも 形や色、いろいろな材料や用具、それと、わたしのよさが生かせるような とってもすてきな力を 大切に、大切に育てていって。

世界の友だちといっしょに、夢いっぱいの未来を この手で つくりだしていけるような たくましくて あったか〜い心をもった人になる。

これが、私たちの図画工作です。

このように目標を理解し工夫しながら読み解くことで教師と子どもたちが教科観を共有することが可能である。「図画工作の目標 (訳)」では、図画工作の活動イメージが子どもにもわかる言葉で表されていて、教師を目指す学生にとっても活動をイメージしやすい表現である。

4-2. 冊子「図画工作とは一教科を考えるー」にみる多様な教科観

冊子「図画工作とは一教科を考えるー」にある各筆者の述べている教科のイメージについてみてみよう。5P、井坂健一郎著「子どもの個性をのばす接し方～何をどのように認めるか～」に注目したい。

『子どもの個性をのばす接し方～何をどのように認めるか～』

私が幼稚園児だった時の絵に対するエピソードがあります。年長のある日、「のりものの絵を描きましょう」という時間がありました。私はその前日、両親と一緒に山に出かけ、そこでロープウェイに乗ったことを描こうと思いつきました。幼稚園の年長でしたが、ロープウェイを描くには大きな山が必要だと思い、画用紙いっぱいに茶色のクレヨンで大きな山を描きました。山のふもとから頂上にかけて黒色の線を斜めに引き、ロープをあらわし、そのロープの途中に四角い箱を描きました。それが私と両親が乗ったロープウェイのつもりでした。

ある程度、完成が近づきつつある時に、担当の先生が私のところに来て「もっと、のりものを大きく描いた方がいいよ」とおっしゃいました。私の頭の中で、子どもながらも山とロープウェイとの比率のイメージがあったので、そんなに大きくは描けません。しかし、先生の助言があったわけですから無視することも出来ず、数ミリずつ大きくしました。その先生は何度も私に助言をし、「もっと大きく」というようなことを言われた記憶があります。

あげくの果てには、描き直しを言われ、新しい画用紙を渡されました。私はしょうがなく、その頃(1970年前後)全盛期だったアメリカのアポロ計画を題材に、ロケットと発射台を灰色のクレヨンを中心にして描きました。そうしたら担当の先生は納得され、その絵の時間は終わって行ったような記憶があります。

ここで考えてみましょう。たしかにその時間の課題は「のりもの」です。「のりもの」を主題に描かせたいというのが教師のねらいでしょう。私が描き直したロケットは、その教師のねらいを達成していたと思います。しかし、肝心の子ども(私)にとって、ロケットとは単なる情報源から知り得たものであり、本物を見たことも乗ったこともない遠い存在です。それよりも、つい前日、自分が乗った「のりもの」のロープウェイの方が、はるかにリアリティーのある存在であり、また自分の家族との思い出も込められる絵になるでしょう。

もう一つの問題は、主題を必ず大きく描かなければならないかどうかです。私はロープウェイを描くにあたって、のりものを数センチの四角で表現し、それに対して画面いっぱいに山を描きました。ロープウェイの臨場感を出すためには必要な組み合わせだと思うの

です。「のりもの」単独で描く絵もあって良いでしょう。ですが、「のりもの」のまわりの風景などを組み合わせてその場の雰囲気伝えるように描いても、充分「のりもの」の絵と言えらと思います。

子どもにとってのリアリティとは、教師の側には存在せず、それぞれの子どもの体験や記憶にしかありません。教師はそれを認め、支援して行くことが大切なのです。

ここでは「子どもにとってのリアリティ」という言葉に注目したい。井坂氏は、「子どもにとってのリアリティとは、教師の側には存在せず、それぞれの子どもの体験や記憶にしかありません。教師はそれを認め、支援して行くことが大切なのです。」と、子ども主体の教科観を述べている。

次に、10Pに掲載された竹内紋子著「便利でイタイ刃物と怪我の話」に注目したい。図画工作の特徴は「つくりだすこと」であり、これには道具は欠かせない。中でも刃物について、「学習指導要領第2章、第7節、第2 各学年の目標及び内容」で具体的に触れている。これを踏まえ竹内氏は「便利でイタイ刃物と怪我の話」の中で、以下の通り述べている。

『便利でイタイ刃物と怪我の話』

刃物は鋼（刃金）と地金（軟鉄）でできていて……、という話は授業でするので、ここでは「刃物と怪我」について、イタイ話を書きます。私達の周りには、たくさんの刃物があります。包丁やハサミ、カッターナイフなど、刃物は生活になくてはならない道具ですね。しかし一方、刃物には怪我がつきものです。刃物は便利な道具ですが、怪我はイヤですね。私がやってしまった刃物による怪我の話をししましょう。

私は、作品の締め切り直前、早く作品を仕上げることにばかり気をとられ、集中していなかった時です。彫刻刀を持った手を勢いよく動かして削っていたら、左手の親指の付け根のふっくらしている場所を、切り出し小刀がゆっくりと通過していきました。「あっ、、、やったな、、、」と思いながら切れたところを見ると血のついたタピオカのようなものが肉の間から見えていました……。生憎、現場には私以外、誰もいなかったので、人がいるところまでなんとか行き、助けを求め、救急車で近くの病院へ運ばれました。救急車を待っている間、寒くて寒くて仕方がなかったことを、今までも鮮明に覚えています。結局、寒い思いをし、12針縫い、治療などに時間もお金もかかり、締め切りが迫る中「イタイ」思いをしました。このように刃物で怪我をすることは専門家でもあります。

では、本当に刃物は危ない道具なののでしょうか？私達は日ごろ刃物と一緒に暮らしています。はさみやカッターナイフ、包丁、のこぎり、ドリル、ペンチ。このような刃物はしっかり手入れをして、正しい使い方を学ぶことも大切ですが、刃物を扱う心構えや、集中力はもっと大事です。

最近、「危ない」という理由で、子どもたちに生活の中で刃物を使わせなくなりました。しかし、人が生きて行くために刃物は絶対必要な道具です。皆さんが教師になったら、子どもたちに図画工作の活動で刃物の正しい扱い方とともに、心構えや集中力の大切さを理解させて、上手に刃物を使えるようにしてあげてください。

そのために皆さんにも、図工実技演習の中で刃物を使いながら「刃物を安全に使うこ

と」について考えてほしいと思います。

竹内氏は平成27年度まで初等教育学科において「図画工作実技演習（立体）」を担当してきたと同時に、彫刻家としても活動している。竹内氏は、ここでは道具の扱い方のイメージについて、道具を上手に使うだけではなく、そこに求められる「心構え」や「集中力」の大切さを述べていることに注目したい。

次に15P、早坂駿吾著「感動ってなんだろう？」を見てみよう。

『感動って何だろう？』

私は図工・美術専攻に所属するようになってから、“図画工作科とは何のためにあるのだろう”とよく考えるようになりました。図画工作科の目標は一般的に「感じたこと、想像したこと、見たことを絵や立体、工作に表す」というイメージが強いはずですが、しかし図画工作科の目指すところはその活動自体に止まらず、「感性を働かせる」といった目には見えない部分への教師側の期待があります。とりわけ小学校学習指導要領を見てもわかる通り、図画工作科の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、(中略)豊かな情操を養う」と記載されています。

情操とは美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心であり、情緒などに比べて更に複雑な感情を指すものとされています。端的に言えば“文化的な価値に感動する心”と言い換えることもできます。つまり、図画工作科の目標を達成するには、例えば児童が九九を覚えようとした時、それを達成するために「九九を何度も声に出して」覚えるのと同じように、「何度も感動すること」が必要不可欠なのではないでしょうか。私のイメージする感動とは人間の感性に訴えかけるような事象に、非言語的、無意識的、直観的な感情を抱くことなのではないかと考えています。人は普段の生活の中にある非日常を発見することで心が揺さぶられています。その経験がどれほど自分に対して影響力を持つのかということが、感動として認識できる一つの尺度なのです。しかし、「心が揺さぶられる」＝「感動する」ではありません。それにプラスして、何か次の行動に突き動かされることが伴うと、感動と言えるようになるのです。次の行動に突き動かされると、何か大袈裟なことを考えてしまいがちです。プロのスポーツ選手のプレーを見て憧れを抱き、これまで以上に練習に打ち込むようになることは、もちろんその人にとっての感動なのだとわかります。しかしもっと身近な感動もあるはずですが、自然の壮大さに触れて感動することもあれば、音楽の美しさに感動することもあるでしょう。しかし“思っているだけ”では、それはその一時の感情にとどまってしまう。

スイスの言語学者ソシュールは、モノがあるからコトバができたのではなく、コトバがモノを存在させているという思想を唱えました。それを信じるならば「感動」とは何を示してできた言葉なのでしょう。「感動する心」の実態は、その感情を表に出すことで「感性を働かせている」と他者に知ってもらうこと、つまり「表現すること」なのです。絵に表すもよし、誰かに話すもよし、自分の感情を他者に伝えることで、形のない感情に輪郭がおびてくるでしょう。それこそが感動なのです。そして図画工作科においてこれの支援ができる形は、児童に“新しいものに触れさせること”だと思います。自分が触れたことさえない材料や道具、今まで知らなかった技法など、児童は目を輝かせながら活動に取り

組むに違いありません。児童の心を揺さぶり、作品として表現することの意義をぜひもう一度考えてみてください。

寄稿当時、早坂氏は学生であり、自己の体験や学びを通して感性を働かせること、即ち「感動とは何か」について考察を試た。ここでは、「感動」には形はないが、感情を表現によって他者に伝えることで、形のない感情を共有できること、こうして共有されたものが「感動」となるのではないかと述べている。図画工作では、感性や情操といった数値化したり形として捉えたりできないことを目標としている。図画工作を指導する者は、こういった掴み難い目標や教科観に対して、自ら問いを立てながら理解を深めて行く必要がある。ここでは、こういった早坂氏の姿を、図画工作を指導する者の目指すべき姿と理解したい。

更に22 P、原田裕太著「図画工作科で学級づくりを」に注目したい。

『図画工作科で学級づくりを』

授業づくりは学級づくりからとは、学級経営に関わりよく言われることです。小学校では基本的に学級担任がすべての教科を受け持つ可能性があります。しかしどの教師にも得意な教科、苦手な教科があるものです。自分が苦手であることと教えることはまた別のはなしになるのですが、どうせなら得意な教科を学級経営に生かしたいと誰でも思うでしょう。

音楽が得意な先生は音楽の授業を通して、体育が得意な先生は、子どもたちとともに運動をすることを通して、学級の様子を把握し、学級づくりに生かしていくという考え方がです。

図工の教科も学級づくりに生かすことができるポイントがいくつかあります。教室掲示・板書・学級通信などは、図画工作科を得意とする教師にとっては、自分の能力を生かしていきたい部分だと思います。

そして授業に関しては、子どもの様子や題材に合わせた声かけ、やる気を引き出すアドバイスをしながら、図工を中心にした学級づくりをしていくことができると思います。自分の得意とする教科をうまく利用することが、上手な学級経営につながるというわけです。

今年度のスタートは一例になったと思います。はじめて特別支援学級（自閉症・情緒障害学級）の担任になりました。在籍児童は男児3名。どんなクラスを受け持ったとしても、子どもたちとの良好な人間関係を築くことは学級担任としての最初の仕事のひとつです。6年の児童Sくんは、クワガタムシやカブトムシが好きで、工作などの活動も好きだということでしたので、「ここを攻めてみよう。」と思いました。

同じ課題の授業やクラブ活動の時間に活用できるよう、図工の時間などに子どもといっしょに作った作品をストックしておいてあります。「これは先生が作ったんだ。Sくんも作ってみたい？」と誘い、コミュニケーションのキッカケにします。Sくんはこのときヘラクレスオオカブトムシを家で飼っていて、サイズ感も同じように作りたいと思っていることが分かりました。大好きなものの話は自分から始めるものです。今までどんな昆虫を飼育してきたのか、飼ってみたいと思っているカブトムシは何かなど、いっしょに工作を

しながら話をします。材料の軽量粘土の扱い方のコツや、羽の色や質感を出すにはどうすればいいかなど、子どもの技能やニーズに合わせて、マンツーマンならではの指導をしました。仕上げにニスを塗りコルクボードに固定、ネームプレートを書いてもらい完成です。

今までにない完成度の作品ができ、Sくんも大変満足していました。その後、第3弾まで作ることができましたが、Sくんにとって「ボクの作品」が3つそろった頃には、「ボクの先生」になることができたのではないかと考えています。

もう一人5年生のMくんとの間でも工作を通して交流を図りました。学校に登校することができなかつたり、学習にとりくむことができなかつたりするような子どもでも、何かを切り口にコミュニケーションがとれるはずで。家庭訪問のときに大好きなゲームのキャラクターをMくんの目の前で作ります。軽量粘土は細部まで表現するのに適しています。次の家庭訪問の時には、「これで作りたいものを作ってみてね。」と置いていった粘土が、ゲームのキャラクターに変わっていました。他愛の無いやりとりの中でも、子どもの気持ちに寄り添い、不安を解消してあげることができれば、心を開いてくれるものです。

特別支援学級の児童との間を図画工作がとり持ったと言えるかどうかは分かりません。しかし、どんなクラスでも言えることですが、担任の強みを生かした創意工夫で、より良い学級づくりができるものと信じています。子どもたち一人ひとりの個性を認め合える図工の授業では、ダイナミックに活動する子どもたちの姿が見られ、支えあう人間関係が築けるのではないかと思います。

原田氏は『図画工作科で学級づくりを』の中で、教師が自身の得意なことで学級づくりが可能であること、個性を認め合える図工の授業では、そこからお互いを理解したり支え合ったりする人間関係を構築することができる、と述べている。これは「教師が図画工作を使って子どもたちとどのように関わるのか」、といった視点で語られていて興味深い。またこれは、現場に立つ教師ならではの視点であり、教師を目指す学生にとって、図画工作を学ぶ意味を深く見通そうと考える足場になり得る主張といえよう。更に、図画工作を製作のみの活動ととらえるのではなく、製作や鑑賞を通して心と心のコミュニケーションが可能であり「心を育てる教科」といった可能性も読み解くことができる。そして、図画工作を子どもが主体の活動ととらえるのと同時に、「子どもたちに何を提案できるか」といった、教師の能動的なイメージに注目したい。

4-3. 図画工作の可能性を探る

これまで述べてきた通り、図画工作は目標や活動イメージがつかみにくい教科である。また、図画工作は指導要領の目標を狭義に矮小化して読み解くのではなく、その奥にある多様で深い可能性を読み解かねばならない。本章では冊子「図画工作とは一教科を考える」とそのもととなった冊子「図画工作実技演習の手引き」に寄稿された各関係者の言葉から、指導要領の解釈と教科観の広がりについて読み解いた。

はじめに鷹野晃氏著『図画工作の目標 (訳)』に注目した。これは、図画工作の活動イメージを子どもにもわかる言葉で表していて、子どもだけではなく教師を目指す学生にとっても活動をイメージしやすい表現である。また、工夫しながら目標を読み解くことで

教師と子どもが教科観を共有できることを確認した。次に井坂健一郎著『子どもの個性をのばす接し方～何をどのように認めるか～』に注目した。井坂氏は自己の体験を踏まえ、幼少期のできごとを「図画工作における表現では何が大切か」といった観点で読み解いている。本論では井坂氏「子どもにとってのリアリティとは、教師の側には存在せず、それぞれの子どもの体験や記憶にしかない」といった主張と、「教師はそれを認め、支援して行くことが大切である」という子ども主体の教科観に注目した。

図画工作の活動では道具は欠かせない、中でも刃物については学習指導要領で触れられていることを踏まえ、竹内紋子著『便利でイタイ刃物と怪我の話』にも注目した。竹内氏は大学の教員であると同時に彫刻家としても活動している。ここでは、自身の制作の中で気づいたことと図画工作の活動を重ね合わせ、道具の使い方を知るだけではなく、「心構え」や「集中力」を育むことの大切さ、すなわち図画工作が子どもたちの心を育む活動であることを説明している点が興味深い。

更に、早坂駿吾氏の『感動ってなんだろう？』にも注目した。早坂氏は学生として、体験や学びを通して感性を働かせること、即ち「感動とは何か」について考察を試みている。ここでは、感動には形はないが、感情を表現によって他者に伝えることで、共有できること、こうして共有されたものが「感動」となるのではないかと述べている。図画工作は、感性や情操といった数値化したり形としてとらえたりできない、曖昧なことを目標としている。そのため、図画工作を指導する者は、こういった掴み難い目標や教科観に対して、自ら常に問いを立て、理解を深めて行く必要がある。こういった早坂氏の姿を、図画工作を指導する者のあるべき姿と捉えたい。

最後に、原田裕太著『図画工作科で学級づくりを』にも注目した。原田氏は小学校に10年以上勤務するベテランの教師である。ここでは図画工作の持つ可能性として学級づくりに言及していることに注目した。原田氏は『図画工作科で学級づくりを』の中で、教師が自身の得意なことで学級づくりが可能であること、お互いを理解したり支え合ったりする人間関係を構築することができる、と述べている。これは現場に立つ教師ならではの視点であり、教師を目指す学生にとって、図画工作を学ぶ意味を深く見通そうと考える「足場」となり得る主張といえよう。また、教師が図画工作を通して能動的に子どもたちに働きかける様子に注目した。

このように様々な関係者が、それぞれの立場から教科に関する理解や可能性について、幅広く、深く、立体的にとらえ、述べている。そこには図画工作を単なる「製作」を中心とした活動と捉えるのではなく「心」に関する可能性を説明していることに注目してほしい。

これは教科の目標である「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」に矛盾しない。また、こういったことから冊子「図画工作とは一教科を考える」が、教科の目標を矮小化することなく探求しながらも、的確に捉えているといえよう。

5. 冊子「図画工作とは一教科を考える」にみる教科観と可能性

これまで述べてきた通り、図画工作は教科観や目標、活動イメージがつかみにくい教科であり、これは様々な考えの「いいとこどり」をしながら、教科の可能性を最大限追求してきた結果である。また図画工作は、教師と子どもたちがお互いに関わり合うことで成立する活動でもある。そのため、指導者自身が指導要領の目標にある多様で奥深い可能性を読み解きながら、教科観や目標を子どもたちと共有する必要がある。図工・美術教室ではこういったことを目的として、冊子「図画工作とは一教科を考える」を編纂してきた。

本論ではこれを基に「4-1. 図画工作の目標について」では鷹野晃著『図画工作の目標(訳)』に触れた。ここからは、小学校学習指導要領にある教科の目標を咀嚼しながら子どもにも理解できる言葉で訳すことで、教師と子どもたちがこれを共有することが可能であることを確認した。

『4-2. 冊子「図画工作とは一教科を考える」にみる多様な教科観』では、井坂健一郎著『子どもの個性をのばす接し方～何をどのように認めるか～』に注目した。ここでは井坂氏の主張を基に、表現が子どもたちの体験や心の動きに関係していること、図画工作が子どもたち主体の活動であることを読み解いた。

図画工作の活動では道具は欠かせない。中でも刃物については学習指導要の中でも具体的に触れている。これを踏まえ本論では、竹内紋子著『便利でイタイ刃物と怪我の話』に触れた。竹内氏自身が彫刻家として活動するなかで気づいたことと、図画工作の活動を重ね合わせ、道具を上手に使うだけでなく、そこに求められる「心構え」や「集中力」について説明し、その大切さを述べていることに注目した。

早坂駿吾著『感動って何だろう?』では「感動」という心の動き、つまり数値化したり、形としてとらえたりできないものを見つめる早坂氏の姿を通して、これを、図画工作の指導にあたる者のあるべき姿として読み解いた。早坂氏は都留文科大学初等教育学科図工・美術教室を卒業、本稿執筆当時は専攻科に進学し、教師を目指している現役の学生であった。こういったことから、冊子「図画工作とは一教科を考える」が大学教員だけではなく、教職を目指す学生とも教科観を共有していることを確認した。

更に、原田祐太著『図画工作科で学級づくりを』では、図画工作の持つ可能性として学級づくりに言及していることに注目した。原田氏はこのなかで、教師が自身の得意なことで学級づくりが可能であること、また子どもたちと一緒に製作する中で、心と心がふれあうことが可能であり、そこからお互いを理解したり支え合ったりする人間関係を構築することができることを述べている。我々大学で実技に関わる教員は、図画工作の指導者に求める資質・能力として製作に関することのみを求めがちである。しかし、原田氏の言う、「図画工作を使って何を子どもたちに働きかけるのか」と言った問いは、活動主体となる子どもたちに教師が図画工作を通して工夫しながら能動的に働きかけるといった意味に於いて、大変興味深い。

これまで述べてきた通り、図画工作は教科観や目標、具体的な活動イメージがつかみにくい教科である。活動イメージを読み違えると、製作だけの教科観に陥り、希薄な活動となりかねない。しかし、冊子「図画工作とは」に寄稿された各関係者の言葉を読み解いた

結果、これに参加した関係者がそれぞれに、図画工作の教科観について理解を深め、指導要領にある教科の目標を矮小化したり形骸化させたりすることなく理解していることを確認した。また、そこには教科の可能性を、単なる道具の使い方や手先の器用さを求めることではなく、「心の動き」に関連したことを求めていることに注目したい。これは、「感性」や「情操」にかかわる内容で、図画工作の教科の目標に合致している。こういったことから、冊子「図画工作とは一教科を考える」が教科の目標を的確にとらえているといえよう。また、教科のイメージを大学教員、大学生、現役の教師が多様な視点で議論することにより、教科観を、具体例をもとに広く、深く、立体的な視点でとらえていることを確認した。

更に、「教師はこれを使って何を子どもたちに働きかけられるのか」といった、工夫しながら活動する教師の能動的なイメージと、活動主体である子どもたちの関わりあい方についても新たな視点を確認した。

6. おわりに

図画工作の教科観は時代と共に変化し続けてきた。これを、宮坂元裕氏は著書「図画工作という考え方」の中で『図画工作は図画でも工作でもなく、造形でもない。「図画工作」という考え方は戦後七十年かけて私たちが育ててきた文化なのである。』^(註7)と述べている。このように、明治から図法や臨画より始まった図画工作の活動概念は様々な時代を経て「いいとこどり」をしながら大きく変化してきた。これは、単に個人の能力を高めただけでなく、日本の伝統文化を読み解き、海外から持ち込まれた多様な価値観を受け止め、新たな文化に寛容な社会を作りだしてきた。また、こういった社会を土壌に日本は世界に誇る文化や技術を作りだし、育み、成長してきたと言えよう。一方、教科観が掴み難く、理解を誤ると「公教育では必要ない活動」といった誤解を招きかねない教科でもある。

近年、世界規模で教育改革が大きく進んでいる。世界の情勢は不安定で刻一刻と、はやく、大きく変化し、そのため未来を予測することは難しい。こうした見通のしきかない時代を子どもたちは生きて行かなければならない。そのためには、様々な体験を通して、主体的かつ協働的に考え、深めあいながら、常に複雑な課題に対峙し、時には相反する意見を折り合いをつけながら集約する力を身につけておかなければならない。こういった力を身につけるためには、ただ単に言語によるコミュニケーションの経験だけでは不十分である。様々な体験を通して、お互いを理解しようとしたり尊重しようとしたりする「心」が必要である。このように、図画工作には新たな時代を生きて行く子どもたちにとって、大きな可能性がある活動といえよう。また我々大人は、様々な可能性を視野に入れ、図画工作に新たな時代に即した「いいとこ」を付け加えて行かねばならない。

本論では、掴みにくい図画工作の教科観や目標、活動イメージを理解し、大学教員、教師を目指す大学生や更に図画工作にかかわる者たちが理解を深め、共有するための研究活動、冊子「図画工作とは一教科を考える」編纂について述べてきた。この活動はまだ始まっておよそ三年であり、深く広い図画工作の可能性に対して、あまりに短い時間であ

る。また、寄稿者数も12名程度であり、本研究は発展途上である。今後、更に多くの方が参加し、我々の考える「図画工作」が示せるよう努めたい。またこういった考えが、より多くの学生や関係者で共有されて行くことを期待している。

本論文執筆にあたり、冊子「図画工作とは一教科を考える」に御寄稿頂いた方々に、心より感謝申し上げます。また、この冊子を編纂するにあたり「たからばこ作戦」^(註9)による作品画像データが多いに役に立った。これなくして冊子「図画工作とは一教科を考える」はあり得なかった。「たからばこ作戦」にご尽力いただいた方々にも、厚く御礼申し上げます。

7. 註

(註1) 宮坂元裕著『「図画工作」という考え方』黎明書房 2016年

(註2) 『高等学校学習指導要領』文部科学省 平成21年3月発行 第7節芸術 第4美術 I1目標 より引用

(註3) 西岡常一氏は、自身の体験をもとに、著書『木に学べ』でそれぞれ「見習いの間は、仕事もおぼえながら心構え、礼儀ということも教わるんです。(158 P)」、「腕のいい棟梁は、人を育てるのも上手でしたな。(160 P)」と述べている。西岡常一著『木に学べ』小学館ライブラリー 1991年

(註4) こどもアトリエとは、日本画家である上田由紀子氏が兵庫県西宮市で主催する、主に子どもたちを対象とした造形教室。

(註5) アポリア【aporia (ギリシア)】アリストテレスの哲学では、ある問題について論理的に同じように成り立つ対立した見解に当面すること。広辞苑 第六版岩波書店

(註6) 宮坂元裕著『「図画工作」という考え方』黎明書房 2016年 P15 より引用

(註7) 『小学校学習指導要領平成』文部科学省 20年3月発行 第2章 各教科 第7節 図画工作 第1 目標 より引用

(註8) 宮坂元裕著『「図画工作」という考え方』2016年 黎明書房 P15 より引用

(註9) 「たからばこ作戦」とは、主に図画工作における児童たちの活動や作品を撮影したデジタル画像・映像を、データベース「たからばこ」で整理すること、これを教師・児童・研究者などが共有すること、児童がいきいき、のびのびとした活動ができる環境づくりを目指す研究活動である。また、子どもたちの心の広がりについても検討すること、参加者が図画工作の活動についてより広く深く理解し、共有することを期待している。平成24年度より「都留文科大学重点領域研究」の支援を受け、山梨県都留市立旭小学校を主な研究フィールドとして、また比較対象研究フィールドとして「こどもアトリエ」でも活動を開始。平成28年度科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究に採択。

8. 参考文献

- 上野浩道著 『日本美術教育思想』 風間書房 2003年
小松佳代子編 『周辺教科の逆襲』 叢文社 2012年
宮坂元裕著 『「図画工作」という考え方』 黎明書房 2016年

Received : September, 30, 2016

Accepted : November, 9, 2016